

深山幽谷「ハワイの山々」オアフ島ハイキング

2013年10月26日～11月1日

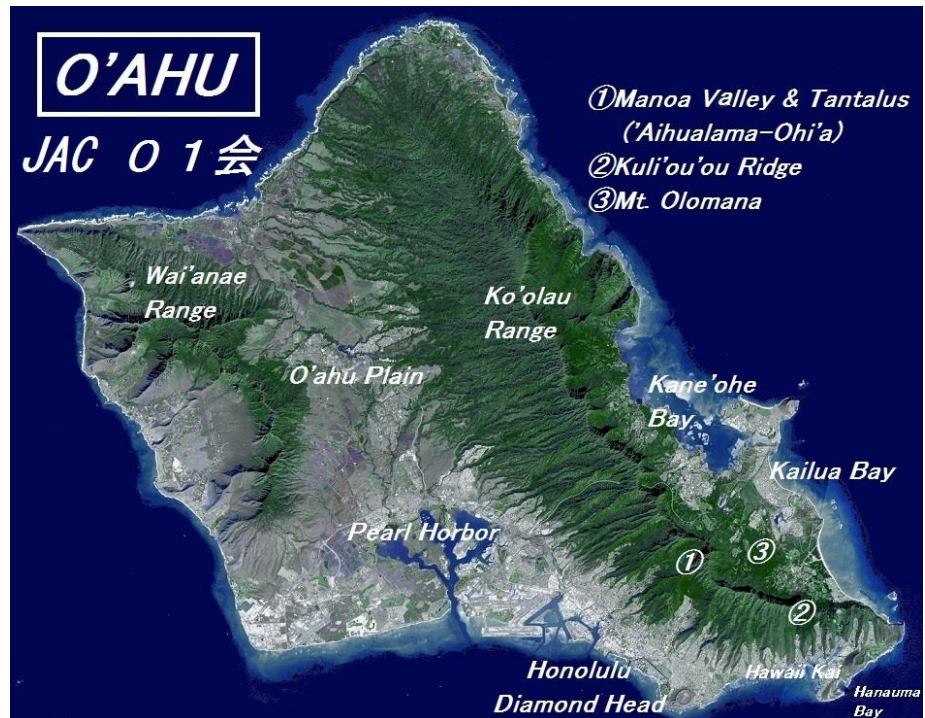
日本山岳会 JAC 01 会パーティー 13名

ハワイは海の話が多いので山の影は薄いのであるが、どうしてもどうしても、登って面白い山々が沢山ある。オアフ島の山々は標高が一番高い山でも 1200m、オアフ島の背骨であるコオラウ山脈はその殆どが 700m 台以下という極低山ではあるが、ハワイの島全部がそうであるように、山肌の深い浸食の結果、陰影が深い溪を創りだして、街のすぐ裏山でも深山幽谷の趣が深いのである。

実は、3年前に「山なかまシリウス」でハワイ・ハイキングを実施したことを知った JAC 01 会の会員から同会でも企画してくれないかという依頼が前々からあり、アメリカのグランド・ティートン山行から帰って急いで計画した山行であった。シリウスの方のハワイ・ハイキングは、老人ホームに入っている母親が出発の前日に入院したために小生だけドタキャン、また JAC の方も実は昨年計画されていたのであるが、小生の頸椎骨折の事故で延び延びとなっていた案件といういわくつきの山行であった。

出発日には、大型で強い台風 27 号と 28 号が並んで本州南岸を通過、飛行機の欠航や成田空港への電車やバスが不通になるのではないかと気を揉んだが、予定通りホノルル行の飛行機は飛び、翌日昼前にワイキキのホテルに入った。

オアフ島の山は下に示したように、狭い島の東側にはコオラウ山脈が北から南まで走り、また、西側にはワイアナエ山脈がある。上述のようにコオラウ山脈は標高が低く、一方ワイアナエ山脈はコオラウ山脈よりやや標高が高くオアフ島最高峰のワイアナエ・カアラ山 1220m もワイアナエ山脈にある。



よく知られたハイキングコースは島内で 50 以上あるが、コオラウ山脈もワイアナエ山脈も一部の山域を除いては公共交通機関が無くアクセスが極めて不便である。車が無い我々は市バスで行けるホノルル周辺のハイキングコースを 3 つ廻ることにした。前頁の地図で示したオアフ島東端部の①、②、③である。いずれもワイキキのホテルから日帰り行程の場所である。

既に 45 年程前のことになるが、小生はホノルルにある研究所に会社から派遣されていたので、オアフ島は休日などによく歩き廻った。従って今回は、生まれて初めて足を踏み入れるというワクワクした感動は無かったが、それなりに昔を思いだしたりして、そこそこ懐かしかった。以下、①から順番に簡単に記す。ワクワクした感動は無いので、話が叙事的になることをお許し願いたい。その代わり地名の伝承などにも触れておいたので、話のネタにでもして戴ければ幸甚である。一般のガイドブックには載っていないルート鳥瞰図やルートの写真も載せておいたので、今後ハイキングを計画される方には多少の参考になるかもしれない。鳥瞰図は Google-earth 画像より作成した。

【①マノア・バレーからタンタラス】

マノア・バレーは、ハワイ大学があるマノア地区の山側に広がる溪谷で、「マノア」とは「山から落ちてきた谷が広く広がった場所」という意味である。ハワイ大学は、ホノルル滞在中に経済学部教授に指導して貰ったり、大学の図書館に通ったりしたので懐かしい場所である。そのマノア・バレーのドンヅマリでバスを降り、溪谷に入っていく。ハワイ大学のライオン植物園やかつてはパラダイス・パークという野鳥園があった場所で、ワイキキの裏山でありながら、周辺は熱帯樹林の様相を呈している。



(マノア・バレー&タンタラス鳥瞰図)

このハイキングコースは、マノア・バレーからマノア滝を経由してホノルルの夜景で有名なタンタラスまでを往復するコースである。マノア滝までは家族連れなどの散策組が多く、赤ん坊を背負って歩いている若い夫婦も多い。このコースの現地での正式な呼び名は“‘Aihualama—‘Ohia Trail”と呼ばれている。‘Aihualama も ‘Ohia も現地自生植物の果実の名前であり、先住民はこれらを食料としていたのであろう（名詞や地名に付いている‘や’はハワイ語独特の英語表記）。

さて、右下の写真はバス終点付近の住宅地である。奥の山々がマノア溪谷の山々で、右側の高い山がコオラウ山脈の稜線である。ハイキングコースは左の道路に入って、写真中央の谷間に登って行く。鬱蒼とした熱帯林の樹冠には蔓が覆いかぶさっていてジャングルの様相である。また、この辺は沢筋でもあるし常にシャワーも降っているので、異常に湿度が高く、また蚊やブヨなどの猛襲もあり余り快適とは言えない。左下の写真がトレイルの入り口。



マノア滝は、かつては水浴びが出来た。今は水泳禁止になっているが、実態はビキニの御嬢さんが水浴びしたりしていて右の写真のとおりである。

タンタラスに行くには、このマノア滝から左の沢筋に入って山腹をスイッチバックでパウオア・フラッツと呼ばれる広い稜線に登り、そこからコオラウ山脈から南に派生した支稜をホノルルのダウンタウン方向に南に下れば、小さな噴火口跡の小山がタンタラスである。

タンタラスは、ホノルルの夜景を眺めるには最高のスポットであり、ワイキキのホテルなどからタンタラス下の道路脇の展望スポットまで夜景ツアーが出ている。

この辺は昔は夜景見物のアベックが多く、また周辺には民家なども全く無い漆喰の闇であったから痴漢や泥棒が多く、夜間には絶対に行ってはいけないと言われていた場所であった。今回は夕闇迫る頃タクシーで行ってみたが、

やはり来ているのはツアーのバンばかりであった。夜景は西側のパールハーバーから東側のダイヤモンドヘッドまで宝石が煌めいていた。ホノルルの街はダウンタウンもワイキキも灯の海であった。

扨て、マノア・バレーからマノア滝までは沢山のウォーキングや散歩の人が入っているが、マノア滝からタンタラス方面へのハイキングコースには地元のハイキング通を除けば入る人は少ない。このコースは上記で‘Aihualama—‘Ohia Trailと書いたが、正確には、マノア・バレーの登山口からマノア滝までが Manoa Falls Trail、マノア滝から稜線のパウオア・フラッツまでが‘Aihualama Trail、パウオアからタンタラスまでは Pauou Frats Trail と Puu ‘Ohia Trail を繋いで行く 4 本のトレイルで構成されている。

マノア滝を後に山腹のスイッチバックに入ると、大きなインディアンバニアンの大木があった。沢山の気根がぶら下がり地面に潜っていた。



やがて登山道が大きく崩壊して通行禁止のロープが現れた。小さい沢全体が抜けたようになっていて、万が一滑るとかなり滑落しそうだったので、安全第一でここでリタイアすることにした。入る時には気づかなかったが、帰途確認してみたら、マノア滝からこのトレイルへの分岐点には立ち入り禁止の標識が立てられていた。



登山口の近くには、私がホノルルに居た昔から Tree Top Restaurant という中華系のレストランがあり、なかなか美味しいビュッヘ・ランチを楽しめた。窓の外には熱帯の樹木が生い茂り、その樹冠では南国の大きな極彩色のオームや極楽鳥も飛び交っていて、なかなかの景色であった。そのレストランは現在も健在で、今回もそのランチを食べたかったのであるが、残念ながらランチタイムは終了していた。

バスでハワイ大学キャンパスまで下り、構内を廻ってみたが、たまたま日曜日であったので、構内はガラんとしたものだ。その晩の夕食はタクシーでモイリリに行き、焼き鳥屋でイッパイやった。

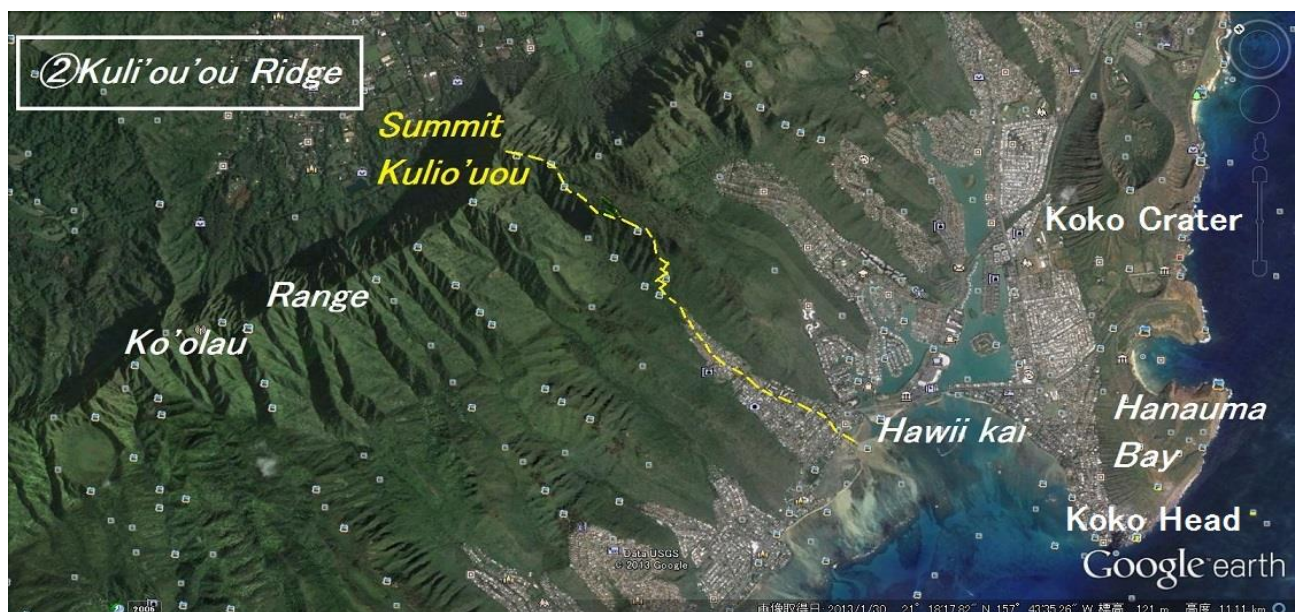
ところで、「タンタラス」というのはどこかで聞いたことがある名前と気づかれたであろう。左様、ギリシャ神話の全知全能の神「ゼウス」の子の名前である。ある時、父の力を試すべくタンタラスが彼の一人息子「ペロプス」を殺し、その肉でシチューを作りふるまったところ、瞬時にして父に悪行を見破られてしまった。神を試したことに對して彼に与えられた罰は、小川の淵に首まで埋められ、その水を飲もうとすると瞬く間に川の水は干上がり、頭上の果実に口をつけようとするとも枝が遠のいてしまうという渇き地獄であった。

地元の名門学校プナホウ・スクールの生徒は、このタンタラスの丘に登る体育の訓練の折、タンタラスはすぐ頭上に見えているのになかなか到達しないのを“Tantalizingly out of reach”（すぐそこなのに、なかなか着かず、じれったい）と言ったそうだが、上述のギリシャ神話のタンタラスの手が届きそうで永遠に届かない渇きのもどかしさに Tantalus と tantalize を引っかけたという如何にもありそうでなさそうな言い伝えがあるそうだ。因みにプナホウ・スクールというのは、ハワイ先住民の高潔な血を引く子弟のみが通える有名校で、アメリカのオバマ大統領もここの卒業生である。



（アイフアラマ・トレイルからマノア・バレーを鳥瞰）

【②ハワイカイ クリオウオウ・リッジ】



オアフ島の東端には、ココヘッドやハナウマベイという景観地があり、その手前にはハワイカイと呼ばれる新規開発の高級住宅街が広がっている。この住宅街は、かつて沼や入江だった湿地を開発して人工島を作り、各戸の裏庭には自家用の専用ヨットハーバーが付属しているという豪華さである。ここに

は主に米国本土から移り住んで来た白人が住んでいる。ココヘッドやハナウマベイの先にはシーライフパークやホエール・ウォッチングのポイントがあるので行かれた方も多いと思う。

さて、オアフ島の北端から南に走ってきたコオラウ山脈はここで海に切れ落ちているのであるが、その切れ落ちる手前にクリオウオウ・リッジと呼ばれるトレイルがあり、その頂上からは晴れていれば南側の太平洋や東側のワイマナロ湾、西側にはワイキキビーチ、北側にはカイルア湾と360度の海の眺めが楽しめる。ハワイの海は陽の加減によって七色に変化するので見ていて飽きない。頂上からはダイヤモンドヘッドやワイキキの高層ホテルなども指呼の内である。

ここの登山口へも路線バスで行く予定であったが、朝寝坊したメンバーがあってバスに乗り遅れ、ホテルからタクシーで登山口まで行った。このバス路線はオアフ島のバス路線の中では特に海沿いの景色が美しい路線で名高いが、タクシーでは外の景色がよく見えなくて残念であった。

最初は沢筋を登るので結構蒸し暑い。やがて尾根筋を登るようになって風が通り抜けるようになり、少しは涼しくなってきた。トレイルはクック松の落ち葉の絨毯の上を通り、やがて道が急坂となった。頂上直下は、急な階段が延々と続き、しかもアメリカ人の大幅の歩幅に合わせた階段なので、些かバテ気味となった。昨日も山では午後から土砂降りになったが、今日も天候が思わしくない。バテバテでやっと登った頂上は五里霧中で景色は何も見えなかった。頂上にだけ雲が掛かった状態であった。

早々に切り上げて下山とし、登山口からまた携帯でタクシーを呼んで、ハナウマベイに立ち寄った後そのままワイキキに帰った。

「クリオウオウ」とは膝ドラムの意味。ハワイ先住民はココナッツの実でドラムを作った。ココナッツの上部を切ってここに熱帯魚「カラ」の皮を張り、このドラムを膝上の大腿に縛って演奏した。しかし、ここが何故クリオウオウという地名になったのか？

ハワイカイは今でこそ高級住宅とリゾートコンドミニアムが建ち並ぶオアフ島有数の高級住宅地になっているが、昔はその辺の入江や池で魚を採っていた僅かな漁師が住んでいた寒村であったことだろう。その漁師の若者達が祭祀や歌垣の時にこの膝ドラムを叩いていたのかもしれない。



(↑ 登山口。道路の終点、水道局 350 号貯水池の標識あり。
奥のガスが掛かっている谷がクリオウオウ・バレー)



(クリオウオウ・リッジ・トレイルとクリオウオウ・バレー・
トレイルの分岐点の標識)



（向こう側の溪がクリオウ・バレー。

低山なのに山壁が深く 深山幽谷の趣）



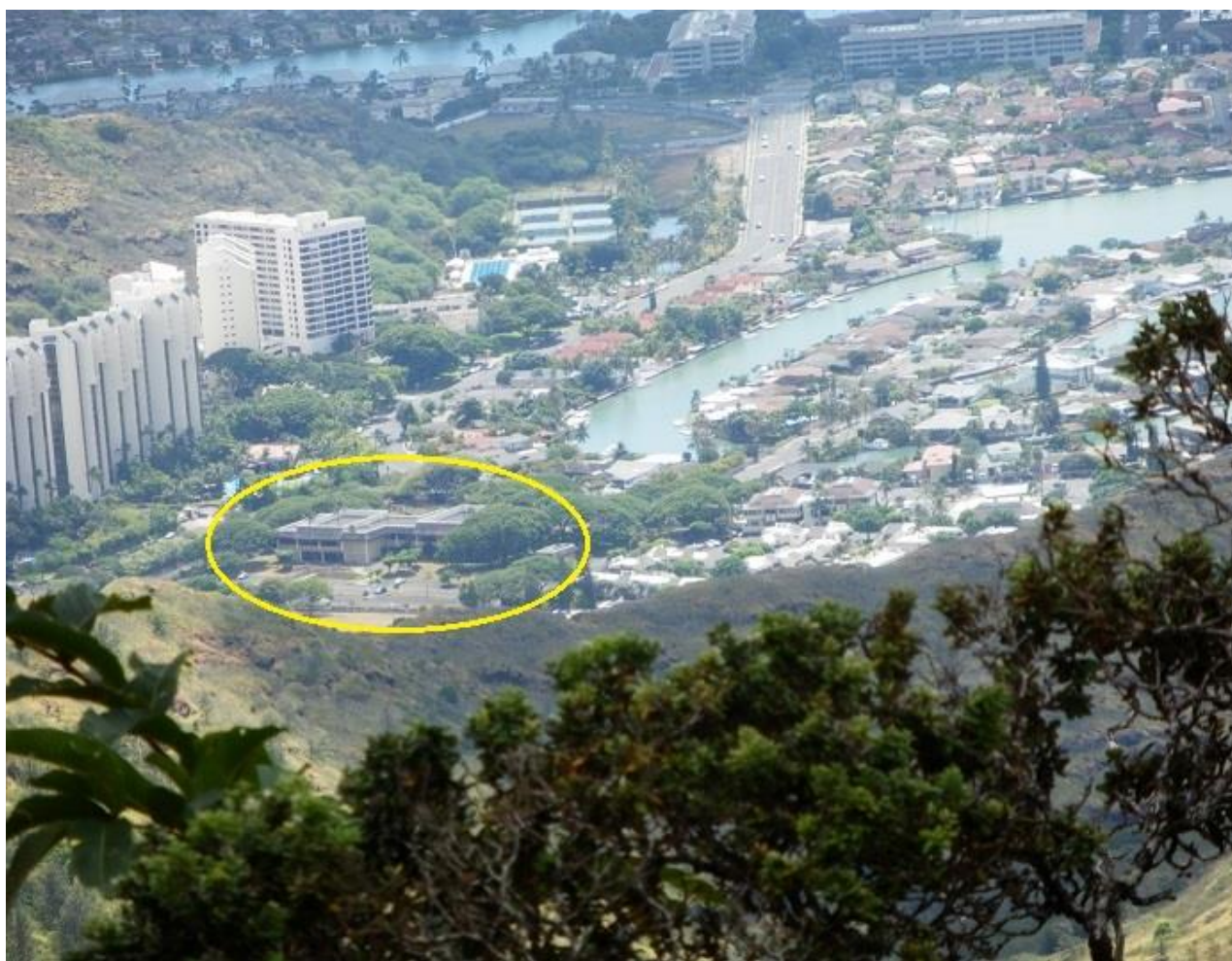
（山頂直下の赤土の階段、これがキツイ）



（頂上直下からダイヤモンドヘッドが見える。中央奥の小さな褐色の岩山）



(頂上直下からハワイカイを望む。左のピラミッドがココ・クレイター、右の岬はココヘッド)



(ハワイカイ望遠。楢円が私が居た研究所 Japan America Institute of Management Science)

【ご参考】

外来種の植物がハワイ固有種の植物を駆逐している。

これらの外来種は生命力が強い上に、鳥や風や動物や人間によって種子を運ばれてテリトリーを拡大している。

このため、外来種の伝播を防ぐために、登山口やトレイルの途中で靴ブラシが置いてある所がある。靴底や靴のサイドに付着したこれらの種子をブラッシングして落とし、これらの種子を拡散しないようにするためである。



【③オロマナ山】



伝説上の巨人「オロマナ」はオアフ島の東海岸を支配していた背丈 10m を超える邪悪で恐れられていた巨人戦士であった。オアフ島の酋長でさえも、誰一人として彼に挑戦できる者は無かった。ある日、酋長はパリラという向こう見ずの若者兵士に、この巨人から島の支配権を取り上げるように命じた。パリラはカエレプルという土地へ旅して行って、そこで巨人戦士の肩に飛び上がって奇襲した。巨人は若者兵士に「お前はどこから何をしに來たのか」と傲慢に尋ねた。若者は答えた。「俺は、超自然的な偉大な力を持つ戦士で知られるカウアイ島の神殿から來たのだ」。これを聞いたオロマナは恐れおののき、命だけは助けてくれと頼んだ。パリラは素早くオロマナを撃って、その体を 2 つに裂いた。その一切れは海側に飛んで行って海岸沿いのマヒヌイ山 (巨人チャンピオンの意) に、他の一切れはそこに残って、現在のオロマナ山になったと伝えられている。

ハワイ・ハイキングの最終日は、この巨人伝説に因んだオロマナ山に登った。現在ではその山容から「サス又の山」とも言われている。尖ったピークが 3 つ並んで屹立しているからである。昨日までの易しいハイキングコースとは異なり、山頂直下は馬の背や絶壁断崖が連続した岩場となっていて、オアフ島でも最も困難なハイキングコースの一つと言われている。



ホノルルからここに入山するには、コオラウ山脈を反対側に越えなければならない。冒頭の1ページ目のオアフ島鳥瞰図を再度ご覧頂きたい。今回登る③オロマナ山は、我々のホテルがあるワイキキからはコオラウ山脈を跨げば目と鼻の先のように見えるだろう。事実直線距離にすると10㎞強しかない。よって、ワイキキからコオラウ山脈を越えて歩いて行けば充実した山歩きが楽しめると思うが、コオラウ山脈は低山の割には断崖絶壁ばかりなので徒歩で超えることができない。ホノルルから山脈を越えて北側に行く道路は3本のハイウェイがあるだけで山脈越えは全てトンネルである。また、昨日登った②クリオウオウ山頂から北側に下ればオロマナ山はすぐ指呼の間（直線距離で僅か5㎞）であって、飛ぶ鳥ならばクリオウオウと一緒に登ることも考えられるが、やはり断崖絶壁で下ることができない。そういう訳で、オロマナ山の登山口まではやはり路線バスで行った。余談であるが、ホテルからタクシーで行けばピンポイントで登山口まで連れて行ってくれるし、バスを途中で乗り換える手間も無く、到着時間も早いし、また帰途も迎えを予約しておけば帰りのバスの時刻を気にする必要もない。相乗りで行けばタクシー代も安い金額である。今回もタクシーにしたらどうかという意見もあった。

しかし、タクシーでは単に運んで貰う「荷物」にしか過ぎず、天井も低いので周りの景色も見えないし、またバスに乗れば地元の人々の生活の一端も垣間見ることができるから、私は海外でもタクシーは使わずできるだけバスや地下鉄を使うようにしている。今回のハワイもそのような理由から、「便利な」タクシーではなく「不便な」路線バスを使わせて貰った次第である。ただ、土地勘が無い場合には、バスはやはり不便である。殊にアメリカではバス停の標識がはっきりしないので、ウロウロとバス停を探している内にバスに乗り遅れるということもよくある。閑話休題。

さて、アラモアナでコオラウ山脈を越えた北側海岸の「カネオヘ」行のバスに乗り換え、パリ・ハイウェイに乗る。バスは断崖絶壁のコオラウ山脈をカットバンクやトンネルで越え、僅か30分で登山口があるルアナヒルズ・カントリークラブ（現在はロイヤルハワイソークラブと名称変更）入口に着いた。トレイルはゴルフ場に一旦入ってからオロマナの山稜を登るようになっている。ゴルフ場入口の守衛さんに入場の許しを得て入山した。守衛さんは、トレイルを外れないこと、登山口までのゴルフ場内の道路は注意して歩くこと、みだりにゴルフコースに入らないこと、P3からは向こう側に越えず必ずここに帰ってくることなどの注意を与えて通してくれた。（ハワイのハイキングコースには、公共の場所ではなく個人の所有地や軍の基地内を通過しなければならないコースも多く、そのようなコースは“Conditional”と呼ばれ、あらかじめ文書や口頭で許可をとる必要があるので注意を要する）。

登山口付近から
オロマナ山を望む⇒⇒



(登山口があるゴルフクラブ入口)

(ゴルフ場を少し入った登山口、標識の手前を左に入る⇒)



最初はオロマナ山稜線への山腹を巻いて行く。

やがて稜線に出ると、左右の視界が開け、右側にはゴルフ場やその先のコオラウ山脈の山々、左側にはカイルア湾が見えてくる。新規に開発され整然と並んだ住宅地や牧場などがよく見える。



(赤土の道、雨が降るとヌルヌルになる)



(クック松の落ち葉の絨毯を踏んで)



(下はゴルフ場、向こうはコオラウ山脈の山壁)



(カイルア海岸方面の池畔に開発された住宅地)



(P1 山頂より P2、向うの海はワイマナロ湾、右の岬はマカプウ・ポイント、右奥はコオラウ山脈)



(トレイルの樹間から屹立した P3 が見えた)



(P1 山頂直下の岩壁、腐ったフィックスあり)

P1 直下には写真右上のような岩場があり、また P2～P3 は更に険しい岩稜帯となっている。P3 から戻ってきた元気な若者ヤンキーパーティーの臍だしネエちゃんも “How fearful! Oh my God!” と言っていたから、平均年齢 70 数歳の我がロートルパーティーは残念ながらパーティーとしては P1 直下でリタイアとした。

P3 まで頑張るというメンバーもいるかもしれないと、念のため確保用のロープやハーネスも用意してきたが、これは予想どおり無用の長物となった。

(P3 山頂直下の核心部の岩稜帯。

“How fearful! Oh my God!” ⇒)



1 本目の「マノア・タンタラス」はトレイル崩壊の為中断、2 本目の「クリオウオウ」は山頂まで登ったが山頂はガスに囲まれて五里霧中、3 本目の「オロマナ山」は頂上直下でリタイアと不本意な結果に終わったが、普通の観光旅行では行けないハワイの山々の一端に触れて頂けたのではないかと思います。

【ご参考】 ハワイのハイキングコースについては、下記のガイドブック等に詳しい。

(1) Stuart M. Ball, Jr. *The Hikers Guide to 'Oahu*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2000.

(2) Stuart M. Ball, Jr. *The Hikers Guide to the Hawaiian Islands*. do.

(3) ハワイ州政府・森林野生動物局の Na Ala Hele (Hawaiian Trail & Access System) にも

ハイキングコース解説が載っているので参照されたい。特にコース地図が詳しく載っている。

<http://hawaii.trails.ehawaii.gov/home.php>

(4) 地形図は、米国地質調査所 (U. S. Geological Survey) 発行、1/24,000 US Topo 7.5-minute map.

日本では販売されていないが、HP から無償でダウンロードできる。<http://www.usgs.gov/>

(本稿 完)

⇒ [「遥かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)